

【令和6年度小学部の実践】

I 小学部の仮説と研究の方法

(1) 小学部の仮説

小学部では、子ども自身が学びのつながりや蓄積、成長を実感できない要因として、子どもと教師という立場の異なる二者間であることや学び方が多様な学習集団であることから、「できた」の実感を共有できていないことが課題に挙げられた。そこで、目の前の事象（学習課題）に対する子どもの「内面の変化」や「学び方」を捉えて授業づくりをしていくことで、教師と子どもが、「できた」実感を共有することを目指す。そして、教師が、子ども一人ひとりの「自分らしい学び方」や「できた」実感を行動レベルで想定し、それを創り出せる「活動」で積み重ねていくことで、子どもの「できた」実感を高めていく。教師が、子どもと「活動」や「感情」を「共有」し、その体験を、エピソードで記録していくことで、「できた」実感の「変容」を捉えることができるだろう。教師が捉えた「変化」や「成長」を子どもに伝わるような関わり方をしていくことで、子どもは自己の成長を実感できると考える。

(2) 研究の方法

①『子ども理解シート』と『K-ABCⅡ検査』による実態把握

事例児童について、『子ども理解シート』を使い、学部の教師で、得意なこと・不得意なことや、背景にある児童の「特性」や「学び方」を推察する。また、『K-ABCⅡ検査』から、児童の学び方を捉え直し、得意・不得意に対する「有効な支援と配慮」を整理する。そして、「児童がやりたいと感じていること」から教師が「1年後に期待する姿」を導き出す。

②『単元で捉える児童の学び（図1）』による授業改善

授業の主活動に対する児童Aの『言動』や『思考』を記録する。『言動』には、設定された場の中にある、周りの人、物に着目したときの言動（模倣、共感、指摘、批判的行動など）を記録する。『思考』には、言動から観察者である教師が推察する心の動き（活動に対する実感、感情や意図、関心なども含む）を記録する。特に『教師との実感のズレ』や活動に対する『「わかった」実感』、教師が期待する学びにつながる『意志』を強調して、フロー化し、期待する学びにつながる『意志』を見取ったときの背景（きっかけとなった事、学び方や性格など個人因子）を整理する。

③「自分らしい学び方」を取り入れた授業づくり

単元で捉えた児童の学びから「自分らしい学び方」を具体化する。その子の「自分らしい学び方」が創られる活動でつなぐことで、質の高い「できた」実感が生まれるようにする。

④『エピソード記録（図2）』による児童の「実感」の可視化と「学びの関係性」づくり

児童の「自分らしい学び方」を創ることを意識し、生活全般で教師が印象に残った場面を叙述する。体験を共有した教師が、出来事の背景を分析し、児童の実感の「具体的な姿」や実感の「変容」を捉える。また、教師自身の関わりや児童の反応も含めて記録し、捉えた「変化」や「成長」を児童に伝わるような関わり方でフィードバックしていく。

エピソード	推察する思考の変容	思考をつなぐきっかけ	学びを支える活動や他者の働き掛け
O/O	関心 教師との実感のズレ 「わかった」実感 感情	・その子だから感じたきっかけとなった事 ・本人の性格や特性によるもの	・期待する姿とズレを明日の学びに向けて改善するための活動や具体的な働き掛け
O/O	関心 意図 「わかった」実感 感情 「できた」実感		・思考の働きやつながり、行動の変容が見られた有効な支援
O/O	期待する学びにつながる意志		

図1：単元で捉える児童の学び

研究の視点：エピソード記録からできた実感の「具体的な姿」と、実感の「変容」の捉える	
記述のポイント：	<input type="checkbox"/> 印象にのこったこと、心が動いたこと <input type="checkbox"/> エピソード(5W1H)
<input type="checkbox"/> どう感じたか、どう解釈したか	<input type="checkbox"/> 自分はどうかかったのか
O/O 「場面」	エピソード

図2：エピソード記録

2 | 年目の取組

(1) 事例児童（以下、児童A）について

得意なこと	不得意なこと
<ul style="list-style-type: none"> ・具体同士を対応させながら取り組むこと ・その場で見たこと、聞いたことを模倣して、動作や単語で表すこと ・繰り返しの体験の中で、具体的な名称や行動を記憶していくこと ・相手の関わりに気付き、表情や距離感から自分なりに捉えて返事や応答すること 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の思いや行動を、自分自身で捉えること ・複数の情報に答えたり、工程が多い作業をしたりすること ・目に見えない目的やゴールに向かって、計画的に行動すること ・言語のみで、意思疎通すること

児童Aは、何事にも前向きに取り組むことができる一方で、笑顔で「わかんない」と答えたり、「まあ、いっか」と簡単に諦めたりする姿がしばしば見られ、学部の教師の間では、児童Aが蓄積できている「学び」に、捉えにくさを感じていた。そこで、児童Aが、周りの人と活動を共同する中で、「これがいいんだ」「だから、〇〇しよう」と明確な意志を持ってゴールできれば、「自分はできている」と学びを実感できると考えた。

また、児童Aの学びを創り出すためには、『具体的な活動に繰り返し取り組むこと』、『周りの人と活動のゴールを共有すること』、『ゴールの共有に向かうような思考の流れを作る『教師の働き掛け』』が必要と考え、この三つの視点で、具体的な有効な支援と配慮を以下のようにまとめた。

得意を生かした支援	苦手への配慮
<ul style="list-style-type: none"> ・物から動作や言葉を想起できるような具体的な場づくり<具体的な活動> ・知っている言葉、汎用性の高い言葉（オノマトペ、あいさつ言葉、呼び掛け言葉）を取り入れた活動<具体的な活動> ・教師や友達と活動を共有する中で、友達から注目されたり、提案されたりする場づくり<教師の働き掛け> ・やったことに相手の反応があり、その場で価値付けされる場づくり 　　<ゴールの共有化><教師の働き掛け> ・具体的な活動を繰り返す中で、条件を少しずらした活動（強化子）<ゴールの共有化> 	<ul style="list-style-type: none"> ・その場で完結できる活動 　　<ゴールの共有化> ・複雑な活動は、二つごとの工程に分けながら展開する<ゴールの共有化> ・本人が知っている選択肢を二つから選ぶようにする 　　<具体的な活動> ・必然的な行動をマッチングできる友達や教師の存在<ゴールの共有化> ・複雑な出来事は、実際の物や動き、言葉を使って区切りながら伝えていく 　　<教師の働き掛け> ・やったことを思い出せる写真付きの掲示 　　<具体的な活動>

(2) 授業実践（生活単元学習）

単元名	お話の世界へレッツゴー！
学習集団	小学部2年生2名、3年生1名、4年生1名、5年生2名、6年生1名 計7名 (生活科 工遊び 2段階相当)
単元目標	・お話遊びをする中で、友達と一緒に畠からカブを持ち帰ることを目指して、活動内容を工夫しながら取り組むことができる。

時数	学習内容	・学習活動
2	お話の世界を作ろう	<ul style="list-style-type: none"> ・創作絵本『ふしぎなカブ』を聞く ・必要なもの（葉っぱ、カブ、冒険ベント）を作る
6	三つの畠で、カブを探して、集めよう	

【児童Aへの具体的なアプローチ】

児童Aにとって、仲の良い友達と一緒に行動すること、一緒に活動して「楽しい」「面白い」と感じることは、心を動かすために重要なことである。そこで、大切な友達や教師と同じ目的に向かって活動できる生活単元学習の中で実践する。

	<ul style="list-style-type: none"> ・葉が1枚のカブを一人で抜く ・葉が2枚、3枚のカブを葉と同じ人数で抜く ・葉が7枚の大きいカブを、全員で抜く ・カブがついてないときは、別の畑に探し行く ・全員分のカブが集まるで探す
	<p>お話し遊び『ふしぎなカブ』を振り返ろう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動写真を見る ・ポートフォリオを書く

お話し遊びは、ストーリーに沿って動作化していくため、一場面を切り取れば、活動のゴールを共有しやすい。本実践では、登場人物になりきり、カブを抜く場面を主活動とした遊びを行った。カブを抜く活動の中に、「抜けない」「カブがない」など意図しない出来事を仕掛けて、カブを抜く目的（活動のゴール）が分かって、試行錯誤しながら抜いたり、諦めずに繰り返し探したりする姿を目指す。

一人ではできなかったり、どうすればよいか分からなくなってしまったりしたときにも、繰り返しの活動の中で、できたことを思い起こし、力強く引っ張ったり、掛け声を出したり、友達を呼んだりするなど、思考をつなげる展開をしていく。

【児童Aの内面の成長】

○Aさんの意志の変容

～「カブのお話？」から
「カブを抜きたい」まで～

授業初日、教師が「カブのお話にみんなで行こうよ」と呼び掛けると、Aさんは、周りの様子を静かに伺っていた。

単元を通して、教師や仲良しの友達に誘われ、褒められる体験を繰り返すことで、自分からカブを探し、抜くことができるようになった。また、畑から葉が見えると、すぐ握り、力強く引き抜いたり、「あったよ。」と友達に教えたりと主体的な行動が見られるようになった。



○教師が期待する姿とAさんのやりたいことのズレ

～「なんで抜けない？」～

「カブは抜く」と主体的な行動が見られた単元中盤。葉が複数のカブを抜くときは、すべての葉を誰かが持てば抜けることは理解していたが、葉の数と同じ人数で引っ張ると抜けるというルールの理解が曖昧なまま抜いていることが多かった。そのため、全員でカブを抜くときも、「誰かに取られてしまうのは嫌」という不安から、持った葉を手放すことがなかった。



○「意志」から

引き出された思考

～「僕も抜きたい！」だから
「こうしよう」まで～

単元後半、葉の数に注目できるようにと、畑にジョウロで水を掛けると畑係の教師が葉を出すやりとりを展開していた。仲良しの友達がジョウロで水を掛けている所に行き、3枚の葉が出てくると、友達と一緒に抜くも自分の葉が切れてしまう。カブを抜いて喜んでいる友達を見て、Aさんはすぐにジョウロを持って「おおきくなあれ」と穴に水を掛け始めた。



3 1年目のまとめ

(1) Aさんの「自分らしい学び方」の整理

実践前の学部教師の話し合いで、「Aさんは、自分の意志が弱く、相手の表情や距離感から雰囲気で応答している」と考えていたが、実践を通して、児童Aは、カブを抜く活動に明確な意志を持ち、主体的な行動が見られた。それは、信頼できる人と『わかる活動』に取り組み、『活動のゴールや感情を共有する体験』によって、『自分はできている』と実感し、『意図的な行動』ができたと分析した。単元を通じたエピソードから、児童Aの学びは、『自ら作り出した意志で取り組む姿』『友達や教師と同じ活動の中で、「嬉しい」「楽しい」の感情を共感し合う姿』『集団の目的に向けて「わかった」実感を増やし、思考を広げる姿』など、自分らしい学びを具体的な姿で整理した。

Aさんの「11月単元での学び」と実践から捉え直したAさんの「自分らしい学び方」は、以下のとおりである。

11月単元でのAさんの学び

- ・カブを抜く活動に明確な意志を持ち、主体的にカブを探したり、葉を見つけるとすぐに持ったり、ジョウロで水を掛けたりすることができたこと

1年目の実践で捉え直したAさんの「自分らしい学び方」

- 自ら作り出した意志で、取り組めたこと
- 友達や教師と同じ活動の中で、「嬉しい」「楽しい」の感情を共感し合えたこと
- 集団の目的に向けて、「わかった」実感を増やし思考を広げられたこと

(2) Aさんの自分らしい学びが創られる「内面の変化」と「きっかけ」を整理

実践後の学部教師の話し合いで、上記の3つの「学び」の姿からAさんの学びは、「吸收」「感情の共有」「思考」「自信」「想起、搬入」と内面が変化していくと整理できた。特に、Aさんが教師や友達から「吸收」したことをやってみたときに、Aさんの言動が変化したり、変化しなかったりすることに着目した。その違いは、Aさんが相手や対象物からの「フィードバック」をどう受け止めるかで異なるのだろう。変化するときは、「わかった」実感から「思考」を広げ、自分なりにアレンジをしているときと考え、自分がやっていることに「自信」が持てたとき、自分の「意志」を持って主体的に取り組む姿が生まれると整理した。

また、Aさんが集団の中で「吸收」できるような体験的な活動や、信頼できる教師から肯定的なリアクションによって他者と「感情を共有」すること、やっていることが変化していくためにAさん自身ができていると思える実感やアレンジする幅のある活動など、内面の変化が生まれるときの「きっかけ」となることを整理できた。

1年目の実践では、Aさんの「自分らしい学び方」が創り出されるように支援していくこと、そのための「きっかけ」を整えてフィードバックしていくことが重要だと分かった。2年目では、1年目に整理した「自分らしい学び方」や児童を主語とした「実感」の捉えを踏まえて「できた」実感が積み重なるように活動をつなげていくことで、児童の実感の「変容」や「成長」を整理したい。そして、教師が捉えた「変容」や「成長」を児童に伝わるようにフィードバックすることで、児童自身が自己の成長や学びのつながり・蓄積を実感できるようにアプローチしていく。